

井上靖

月の光
しろばんば

しろばんば 月の光

井上靖

新潮社版

しろばんば・月の光

〈井上靖小説全集25〉



昭和48年3月20日発行

昭和54年7月30日3刷

定価 1100 円

© Yasushi Inoue, 1973,
Printed in Japan.

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話・業務部(〇三)二六六一
五一一一、編集部(〇三)二六
六一五四一一 郵便番号・一
六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替えます。

目次

しろばんば

五

花の下

三〇四

月の光

三二七

墓地とえび芋

三六三

自作解題

三七三

装
画
加
山
叉
造

井上靖小説全集 第25卷

しろばんば

前編

一章

その頃、と言っても大正四、五年のことで、いまから四十数年前のことだが、夕方になると、決って村の子供たちは口々に「しろばんば、しろばんば」と叫びながら、家の前の街道をあっちに走ったり、こっちに走ったりしながら、夕闇のたちこめ始めた空間を綿屑でも舞っているように浮遊^{うきゆう}している白い小さい生きものを追いかけて遊んだ。素手でそれを掴み取ろうとして飛び上ったり、ひばの小枝を折ったものを手にして、その葉にしろばんばを引っかけようとして、その小枝を空中に振り廻したりした。しろばんば

というのは「白い老婆」ということなのであろう。子供たちはそれがどこからやって来るか知らなかったが、夕方になると、その白い虫がどこからともなく現れて来ることを、さして不審にも思っていないかった。夕方が来るからしろばんばが出て来るのか、しろばんばが現れて来るので夕方になるのか、そうしたことははっきりとしていなかった。しろばんばは、真っ白というより、ごく微かだが青味を帯^おんでいた。明るいうちはただ白く見えたが、夕闇が深くなるにつれて、それは青味を帯^おんで来るように思えた。

しろばんばが青味を帯^おんで見えて来る頃になると、帰宅を促すために子供たちの名を呼ぶそれぞれの家の者の声が遠くから聞えて来た。「ゆき、ごはんだよ」とか、「しげ、めしだよ」とか、「早く来^こんとめし喰^くわせんぞ」とか、そんな声が、遠くから聞えた。すると、幸夫が居なくなり、次に茂が居なくなるといった具合に、子供たちは一人減り二人減りして行った。

子供たちはお互いに何の挨拶もしなかった。しろばんばの浮遊している夕闇の中を、けんけんしながら家の方へ走って行く者もあれば、ひばの枝を右手に高く翳^{かき}して、家の方へ勢よく駆けて去って行く者もあった。それぞれ各自の家に呪文でもかけられたように吸い寄せられて行った。

洪作はいつも一番遅くまで遊んでいた。洪作のところは

夕食が遅く、洪作の遊んでいるところへ夕食を報せにおぬい婆さんがやって来るようなことはめつたになかった。だから、洪作は毎日仲間が一人残らず居なくなってしまうまで街道で遊んでいるのが常だった。そして友達のたれもが居なくなり、夕闇があたりをすっかり閉じこめてしまつてから、自分の家の方へ歩いて行つた。

洪作は自分がおぬい婆さんと一緒に住んでいる土蔵に帰り着くまでに、街道に沿つた家々の幾つかの明るい夕食の灯を眼にした。子供たちの遊び場は、部落の者たちがお役所とか御料局とか呼んでいる帝室林野管理局天城出張所の正門前に決つていた。そこから土蔵までの間に、道に沿つた家はほんの数えるほどしかなかった。お役所の前に洪作の家の本家に当る「上の家」という屋号の家があつた。ここには洪作の祖父と祖母と、そして洪作の母の弟妹たち、つまり洪作にとっては叔父叔母に当る男の子や女の子が居た。一番末のみつは洪作と同年であつた。

洪作は本家の明るい灯を見、そこに自分の母方の祖父母が居ることを知つていても、そこを覗くことはしなかつた。昼間はみつのところへ遊びに行つたり、用事がなくても何回も自分の家と同様に上り込んだりしていたが、夕食の時は、その灯に妙に疎遠なものを感じた。ここはお前の家とは違ふのだぞ、お前の家は土蔵なのだぞというようなも

のを、一家の者たちが賑かに談笑しているその雰囲氣に感じた。

時に、何かの用事で、洪作は本家に上つて、みなが夕食を食べている席に顔を出すことがあつたが、そうした時、祖母のたねは、

「洪ちゃ、ここで食べて行きな」

と、必ず声をかけてくれた。

「ううん、うちへ行つて食べる」

「こども、お前の家だがな。そう嫌わんで食べて行つておくれ」

「ううん、おら、いやだ」

洪作は祖母たねが何と言つても、執拗にその招きには応じなかつた。祖父やその他の者たちは、そうした時大抵洪作のことなどには氣を奪られず勝手に箸を動かしていた。

洪作はそうした本家の食事時の雰囲氣には反撥せざるを得ないものを感じた。食事時でない時は、自分の家と同様に振舞つていたが、食事時だけは歴とした他人の家になつた。自分の家でもないのに、御飯など御馳走になるものかといつたところが、洪作の氣持の中にはあつた。

この本家の隣に小さい路地を挟んで雜貨屋があつた。小さい店に金物類を初めていろいろな雜貨が土間からはみ出す程ぎっしり詰まつていた。村ではただ一軒の雜貨屋

であり、金物屋であつたので、針金とか釘とか鍋とか庖丁とか、そういった物を買う時は、村人はみなこの店へ来た。

そしてその隣は『さどや』という屋号の農家で、母屋のほかに牛小屋があつて二頭の牛がいつも暗い中に鼻をうごめかしていた。そのさどやの前に、日傭仕事をしている文吉という独身の四十男の住んでいる小さい家があつた。この文吉の家の隣が、部落では一番庭らしい庭を持った洪作の家の屋敷になっているが、今は母屋の方は東京から来て村医をしている医者に貸し、屋敷の裏手の土蔵の方に、洪作とおぬい婆さんの二人は住んでいた。母屋の医者は夫婦で子供がなかつたので、家の中はいつもしんとしていた。医者ではあつたが、患者は殆どなかつた。死にそんな病気にでもならぬ限り、部落の者はたれも医者などには診て貰わなかつた。

洪作はそうした部落の旧道に沿つた四、五軒の家々から洩れて来る明りを横眼に見ながら、自分の家の屋敷にはいり、母屋の脇を通つて裏手の一段高くなつたところに建てられてある土蔵へと戻つて行く。洪作が戻る頃、おぬい婆さんは大抵、夏でも冬でも、土蔵の階下から洩れているランプの光をたよりに、戸外で炊事をしていた。炊事といっても、老婆一人子供一人の生活なので至極簡単な筈だったが、どういふものか、夕食の支度はいつも遅くなつた。

「ただいま」

洪作は言つた。『ただいま』というような言葉は洪作以外村の子供たちは一人も使わなかつた。しかし、洪作はおぬい婆さんから、戸外から帰つて来たら必ずそういう言葉を口から出すように言い含められ、それに慣らされて来ていた。

洪作はおぬい婆さんと二人きりで、毎晩ランプの下で遅い夕食の膳に向つた。

「坊」

おぬい婆さんは洪作のことをこう呼んだ。

「上の家の方へ今日は何度行つたかい」

「二度だ」

「あんまり行かん方がええ」

おぬい婆さんは言つた。夕食の時、必ず二人の間に交される会話であつた。洪作はそれに対していつもいい加減な返事をした。行かないことを約束するわけには行かなかつた。上の家の附近が、洪作ら少年たちの遊び場の中心地で、一日に何度も水も飲みに行かなければならなかつたし、珍しいものでも作つていればそれも食べに行かねばならなかつた。

「上の家へ行くと、あんまりええことはないぞ。大五の餓鬼はほんとに小憎らしい。道で会つても知らん顔していよ

る。みつはみつで、前はほんに氣前のええ子だったが、いまはみんなを見習うて、いつ会ってもふくれっ面をしよる。大方、大人たちが悪いことを吹き込んでいるずらよ」

おぬい婆さんの言うことは決っていた。洪作は三百六十五日、毎晩のように本家である上の家の悪口を耳にしなればならなかった。おぬい婆さんは本家の子供たちの悪口を言ったが、本当はその親である洪作の祖父母たちをやったたくて堪らないしかった。しかし、さすがに祖父母の名は口には出さなかった。そうしたおぬい婆さんの心の内部は、子供の洪作にも手に取るようによく理解できた。「上の家のおじいさんは嫌いだ」

時に洪作が祖父のことをこう言おうものなら、おぬい婆さんは眼を細めて、洪作の頭を撫でんばかりの恰好で膝をすり寄せて来た。

「洪ちゃんの本当のおじいさんだぞ。眼に余ることがあろうと、どんなこと言われようと、悪口を言うでないぞ。いいかい。上の家の衆は料簡は狭いが、みんな根はいい人たちなんじゃ」

そんなことを言った。それは洪作にというより、自分自身を納得させる言葉を声に出して言っているに違いなかった。

洪作は嬉しそうなおぬい婆さんの顔を見たいために、時

時本家の上の家の悪口を言った。悪口を言う氣になれば、實際悪口になる材料は幾らでもあった。洪作は同い年のみつと毎日のように一緒に遊んでいたが、上の家の祖父母ははっきりと自分の孫より自分の娘の方を可愛がっていることを示したし、犬猿だならぬおぬい婆さんに引き取られて一緒に住んでいるというだけで、洪作を自分たちの仇敵の片割れのように見る場合もあった。

また上の家には、洪作には曾祖母に当るおしな婆さんも住んでいたが、この曾祖母までが洪作をとかく色目で見がちであった。おしな婆さんは祖父の養母に当り、家の者たちと血の繋りはなかったが、みなからは大切にされていた。高齢のため居るか居ないか判らぬように奥の一室に閉じこもったままひっそりと生きていたが、いつかたまたま洪作と顔を合せた時、

「可哀そうに、ろくでもないもんの人質になって、この子はだんだん変な子になりよる」

と言ったことがあった。その時洪作は皺だらけの顔の中で口がもごもご動くのを見詰めていたが、やがて、

「おばあちゃん、いい年して死なんのか。いつ死ぬんだ？」と言った。実際に洪作には、背を折れそうに曲げて、た

るんだ皮膚に深い皺が刻まれている七十歳に近い老婆が、いつまでも生きて口をきいているということが不思議に思

われた。

おしな婆さんは洪作の言葉に呆れ果てたというように眼をしろくろさせて二の句が継がないという恰好だった。洪作は、おぬい婆さんを悪もんと言ひ、自分を変な子になったと言ったおしな婆さんに一矢報いてやり、一日中置物のように一箇所に坐ったまま動かないでいる老婆の許から離れた。

おぬい婆さんは曾祖父辰之助の妾であった。辰之助は地方では一応名を知られた医者で、若くして静岡藩掛川病院長、静岡県韭山医局長、三島の私立養和医院院長といった肩書を持っていたから、もし彼が野心的な人間であつたら、晩年を郷里の伊豆などへ引っ返まなくてすんだ筈であつた。それをどういうものか、一番働き盛りの三十代半ばに、總ての公職を棄てて伊豆の山奥へ引ッ込んで、田舎医者として後半生を送つたのである。辰之助は田舎で開業医として忙しく暮した。駕籠で、半島の基部の三島や、またその反対の半島の突端部の下田まで、往診に出掛けるような繁昌ぶりを示した。

おぬい婆さんは、その辰之助が下田の花柳界から落籍して連れて来た女性で、それでなくてさえうるさい土地では、かなりいろいろ取沙汰された人物であつた。おぬい婆さん

は辰之助が五十歳で他界するまで蔭になり日向になりして辰之助の面倒を見、その死後も村に居着いてしまつた確り者だから、村人全部から白い眼で見られるだけのことはあつたようである。

辰之助は中年以後、正妻のしなとはずっと別居していた。しなは沼津藩の山本という家老の家の娘で、嫁に来てから一度も台所に出たことがないといった女性であつた。よく言えば世間知らずのおっとりした女であり、悪く言えば、何もできない女であつた。婚礼の時朱塗の風呂桶と二本の薙刀を持って来て、そのことが長く村人の語り草となつていた。

辰之助は本妻のしなとの間にも、妾のぬいとの間にも子供がなかつたので、自分の兄の子供である文太を養子として迎え、それまでの家、つまり上の家を文太に譲つて、自分は近くに家を一軒構えて、そこで開業して妾のぬいと住んでいた。晩年辰之助は文太の長女を分家させ、医者を開業していた家を与えることにし、その養母としてぬいを分家の籍に入れた。辰之助は妾のぬいの晩年をそのようにして酬いてやつたのであつた。戸籍上祖父の妾を養母とするようになった文太の長女は、洪作の母、七重である。

洪作の父は軍医で、その頃母七重と共に任地の豊橋に住んでいた。どうして洪作が両親の許を離れて曾祖父の妾ぬ

いの許に預けられるようになったか、当時の洪作には勿論理解の行かないことであつたが、それはおしな婆さんの「悪いもんの人質になつて」という言葉が、ある程度真相をうがった言い方であつた。おぬい婆さんは、洪作の家に於ける自分の不安定極まる地位をもっと確りしたものにするために、洪作の両親から洪作を人質として取り上げるといった気持もないではなかつたに違ひない。

そもそも事の起りは、洪作の母の七重が、洪作のあとに妹の小夜子を生んで、幼兄一人を育てるには人手もなく、そんなことから、ごく短期間のつもりで、洪作をおぬい婆さんに預けたのであつた。おぬい婆さんは自分の懷ろに転がり込んだ願つてもない宝物を、一度手に入れた以上終生決して離すまいと決心したのに違ひなかつた。おぬい婆さんがそうした考えのところへ、洪作自身が、おぬい婆さんの許で五歳から六歳へかけての一年を過すうちに、両親よりおぬい婆さんの方になつてしまつて、家へ帰りがたがなくなつてしまつたのである。

こういうわけで、洪作は五歳からずっと郷里の伊豆半島の天城山麓の山村で、おぬい婆さんという全く血縁関係にはない女性と起居を共にすることになつたのであつた。従つて、おぬい婆さんと本家の上の家とは、全く仇敵の關係にあつた。曾祖母のおしな婆さんにしてみれば、おぬい婆

さんは自分から夫を奪つた不倶戴天の仇敵であつたし、祖父母たちから言わせれば、曾祖父辰之助に取り入つてついに本家よりも大きい家屋敷を手に入れ、しかも自分たちの娘を養女としてその義母になりすまし、いまは孫の洪作まで人質に取り上げてしまつてゐる腹黒い女であつたのである。

上の家は人の出入りの多い家だつた。平生は洪作の祖父母のほかに、洪作と同年のみつ、みつより三つ年長の大五、それに曾祖母のおしな婆さんの五人暮しであつたが、この他に二人の人物が絶えず出入りした。それは東京の中学校へ行つてゐる大三と沼津の女学校へ行つてゐるさき子であつた。大三とさき子は休暇ごとに家に帰るのは勿論だが、それ以外でも日曜と休日が続いたりすると、必ず家へ歸つて来た。二人とも、洪作にとっては叔父と、叔母に當るわけであつたが、みつが大三のことは兄さん、さき子のことば姉ちゃんと呼んでいたので、洪作もまたそれに倣つて同じ呼び方をした。

だから、正月とか、春休みとか、夏休暇の時は、上の家は大人数だつた。食事の時などは子供の洪作の眼にもひどく賑かに見えた。朝から晩まで奥の一間に閉じこもつてゐるおしな婆さんも、食事の時だけは舂を二つに折つて、畳

を管^さめるようにして食卓のある居間へ出て来たので、八畳の部屋はいっぱいになった。曾祖母おしな、祖父、祖母、大三、さき子、大五、みつと家族だけでも七人、それに大抵使用人が一人か二人いた。

祖父文太と祖母たねは子沢山で、この他にまだ四人の子供を持っていた。長女は洪作の母である七重であり、その下がアメリカへ渡っている大一、満洲へ行っている大二、それから同じ半島の西海岸の大きい農家松村家へ養女^{だいに}に行っているすず江である。しかし、洪作は大一にも、大二にも、またすず江にも会ったことがなかった。ただ名前だけは、何れもみつの呼び方に倣^{なま}って、大一兄さん、大二兄さん、すず江姉さんと呼んでいたが、どのような風貌を持っている人物かは全く知らなかった。

祖母のたねが、時々、洪作がみつと同じような呼び方をするのを聞き咎^{とが}め、

「坊は、大一叔父さん、大二叔父さん、すず江叔母さんと呼ばんといかん。兄さんや姉さんじゃない。叔父さんと叔母さんじゃ」

と訂正した。しかし、洪作はそれに応じなかった。もしそうするなら、大三兄さんも大三叔父さんでなければならなかったし、さき子姉ちゃんもさき子叔母ちゃんと呼ばなければならなかった。そんなことは考えてみただけでおか

しくて口から出せないことだった。さき子姉ちゃんを叔母ちゃんなんて言えるかと洪作は思った。

しかし、洪作はある時ふといたずら心から、さき子を叔母ちゃんと呼んでみたことがあった。さき子がどんな返事をするか興味があった。

「さき子おばちゃん」

洪作が呼びかけると、さき子は当時女学生の間で流行していた三つ編みの長いお下げ髪を、肩から前へ垂らしていたが、その髪のをぼんとうしろへ投^なげて、

「おばちゃんなんて言っちゃいけない。そんなこと言ったらきかないから」

と言った。

「だって、おばちゃんじゃないか」

「おばちゃんでも、おばちゃんなんて、二度と呼ばないでちょうだい」

さき子は怖い顔をして洪作を睨^{にら}んだ。洪作がさき子を叔母ちゃんと呼ぶことに抵抗があるように、さき子もさき子で、自分がおばちゃんと呼ばれることを嫌った。洪作は五^ごのことは「五ちゃん」と呼び、みつのことは「みっちゃん」と呼んだり、仲違いしている時は「みつ」と呼び棄てにしたりした。

おめい婆さんは上の家の子供たちのことは、面と対った

時は別だが、蔭では殆ど呼び棄てにした。呼び棄てにするばかりでなく、大抵悪意のある形容詞をつけた。『ぐずのおみつ』、『あくたれの大五』、『困りもののさき子』、『ろくでなしの大三』といった具合である。形容詞をつけないで名前だけを呼ぶというようなことは殆どなかった。ただ一人例外として、おぬい婆さんは、生れるとすぐ死んだ四男だけは褒めた。

「あの赤ん坊は利発そうなええ顔をしておった。あれが育ったら、上の家ももう少しましになったろうが、世の中はうまく行かんもんじゃ」

そんな憎まれ口をきいた。

洪作にとって、おぬい婆さんと二人だけの土蔵の中の生活は結構楽しかった。何一つこれといった不満はなかった。上の家へ行くと、賑かで面白そうではあったが、そのことが特別に羨しくも思われなかった。洪作の土蔵の中の生活は、判で押したように毎日決りきったことの繰返しであった。朝眼が覚めると、洪作は必ず、それが朝の挨拶でもあるように、床の中で、

「おばあちゃん」

と、おぬい婆さんと呼んだ。おぬい婆さんは耳が遠いことになっていたが、不思議にこの『おばあちゃん』と呼ぶ洪作の声だけは、階下にいても、また土蔵の外で炊事をし

ている時でも、耳さとく聞き分けた。

「おばあちゃん、おばあちゃん」

洪作が二声三声呼んでいるうちに、必ず、

「どっこいしょ、どっこいしょ」

と、階段を上って来るおぬい婆さんのかけ声が聞えて来て、それが終わったと思うと、階段を上りきったところでおぬい婆さんが背を伸ばす姿が見えた。おぬい婆さんはそこで一息入れてから、

「あいよ、あいよ」

とたて続けに返事をして、戸棚をあけ、そこに用意してある紙にひねった駄菓子を持って洪作の枕許へやって来た。

「はい、おめざ」

おぬい婆さんは紙包みを洪作の手に握らせたり、蒲団の中へ突っ込んだりして、

「ごはんできるまでまだ間があるから寝とれや」

と言って、また階段を降りて行った。早く起きよとも、起きて顔を洗えとも言わなかった。ひねり紙の中身は大抵黒砂糖の飴玉だった。洪作はその黒玉を二つか三つしゃぶり終えるまで床の中にはいっていた。

こうした朝のおめざは、上の家では非難されていた。祖母のたねはよく、

「顔も洗わんで黒玉なんぞしゃぶって、いまに歯がぼろぼ

ろになる」

と、洪作に言った。そのことを洪作がおぬい婆さんに告げると、

「ぼろぼろになるような歯は持つとらん。おみつとは違うわい。そう言っておやり」

と息まいて言った。ともかく、毎朝のように、洪作は寝床の中で黒玉をしゃぶった。時には、それが大きい水晶玉一個の時もあった。水晶玉は白砂糖の飴玉で、微かにハッカの味がした。それ以外では豆板とか、ねじまきとかいった駄菓子が多かった。

おめぎを食べ終ると、洪作はまた、

「おばあちゃん、おばあちゃん」

とおぬい婆さん呼び、

「起きていい？」

と訊く。

「さあ、起きな。あつあつのお味噌汁ができてる」

おぬい婆さんは言いながら、洪作に着物を着せ、つけ紐をきゅうとしごくようにして、それを前で結んだ。着物を着せて貰いながら、洪作はいつも鉄格子の小さい窓から戸外を見た。窓のすぐ向うにざくろの木があって、ざくろの葉が窓いっぱいにかぶさっているの、その葉越しに、戸外の風景を眺めることになる。風景といっても、ざくろの

葉の間から見えているのは田圃であった。夏は青い稲田が、冬は冬枯れた黒っぽい稲の切株の置かれてある田圃が見えた。向いの家で作っている田圃の一枚が、丁度土蔵の窓の高さにあった。洪作の家の敷地と小川で境し、その向うの田圃になっている地盤は三尺ほど高くなっていた。

しかし、田圃の一枚が見えるのは立っている時で、もしこの窓へ身を寄せて、そこから戸外を覗くと、次第に傾斜している何枚かの田圃と、陥没した地盤を置いてその向うにある隣り部落の一部が見えた。丘が見え、農家が見え、森が見え、白い街道が見え、そしてずっと遠くに玩具のような形のいい小さい富士が見えた。

洪作は着物を着ると階下へ降りて行って、家の敷地の端を流れている小川の岸の一部の、板を敷いて流し場になっているところで顔を洗った。小川の向うは三尺ほどの高さの土堤になっていて、その土堤の上には土蔵の二階から見える田圃が広がっているわけである。洪作は手で水を掬い、口に含んで二、三回ぶくぶくをすると、あとは同じように手で水を掬っては顔を撫でる。顔を洗うのには何程の時間もかからないが、冬期には土堤の草の一本一本に氷柱がぶら下るので、それを手でむしり取ったり、地面へぶつけたりすることで結構時間を費す。それで、おぬい婆さんが迎えに来るまで洪作はこの洗い場からなかなか離れられな

った。

食事は二階の階段を上りきったところの、南の窓の傍で食べる。この窓も北の窓と同様に鉄柵がはめられてあった。朝食の献立は、毎朝決っていて、それが変わるようなことはめったになかった。変わるものと言えば、味噌汁のみと漬物の種が季節によって大根になり、茄子になり、瓜になるだけの話だった。味噌汁と漬物の他に、生薑とらっきょうと金山寺味噌が常に食卓の上にあった。こうした献立は朝ばかりでなく、昼食にも夕食にも共通していた。おぬい婆さんは食事に手をかけることが嫌いであるし、その上魚肉も牛肉も好まないの、朝食と、昼食や夕食の違いは、菜っぱの煮つけが加えられてあるかどうかということぐらいのものであった。

「さあ、坊、熱い味噌汁をごはんにかけるかい」

とか、

「金山寺のお茶漬するかい」

とか、おぬい婆さんは食事ごとに、洪作に御飯に汁類をかけることを勧めた。おぬい婆さんは自分が歯が悪くて、三度三度そうして食べていたので、いつかそれを幼い洪作にも押しつけていた。

朝食を食べていると、近所の幸夫や亀男や芳衛などの、洪作を学校へ誘う声が聞えて来る。

「洪ちゃ、学校へ行こう。洪ちゃ、学校へ行こう」

そう言って、何人かの子供たちが声を揃えて土蔵の前で呼ぶが、それは、コウチャ、ガッコエコウと聞える。登校の誘いであるが、学校の始まるまでには、いつでもたっぷり一時間はあった。時には一時間半近くあることもある。学校までは走れば五分もかからなかった。

それでも友達の声が聞えると、洪作は教科書と弁当を大急ぎで風呂敷に包み、それを持って大周章にてあわてて、階段を駆け降りる。

「坊や、坊や」

そのあとから決って、おぬい婆さんは紙かハンケチを持って追いかけて来る。紙やハンケチなどは、部落の他の子供たちには無縁なものであった。洪作もまた、そんな物を持って行っても使うことはなかった。しかし、おぬい婆さんは大切なものでも忘れたように追いかけて来る。おぬい婆さんはうちの坊は他の部落の餓鬼共とは違っているのだという信念を持っており、違っていることの一つの証拠として、洪作に紙やハンケチを持たせねばならないのであった。

子供たちは次々に部落の家を廻り、学校へ通っている仲間を誘い出すと、御料局の横手とか、洪作の家の傍の田圃のいなむらの傍だとかに集って、登校するまでの時間をた